

審査の結果の要旨

氏名 塩見 寛

本論文は江戸幕府による計画的市街地である宿場町に着目し、その計画意図の解明とその後の変容過程分析による計画意図の継承に関して、なんらかの法則性を見いだすことを目的としている。対象として静岡県内の東海道の宿場町 22 宿のうち、近世に入り災害による計画的な移転等によって新たな宿駅建設が明らかな 10 宿をとりあげ、分析をおこなっている。

論文は 5 つの章から成っている。

第 1 章は、研究の枠組みに関して、研究の目的を明らかにすると共に各種の既往研究を示し、宿場町研究の歴史を示している。とりわけ、同様の計画都市である城下町と比較して、宿場町研究が宿駅制度の研究など交通史や経済史の分野に偏っており、物理的な都市計画に関する研究が乏しいことに言及し、分析手法確立の重要性を述べている。本論文は、宿場町研究における新しい分析手法の提起をおこなっている点に新規性があることを論じている。

第 2 章は、宿場町の空間構成を論じるための予備的考察として宿場町の基本形態について論じている。特に徳川幕府にとって最重要とされた東海道の宿場町の空間要素として、問屋場、本陣などの公共施設、一筋型や街区型などの街路形状、寺院や神社などの宗教施設、枳形などの見付形状、その他、路地や水路など絵図から読み取ることのできる副次的形状に分けて論じることを述べている。また、新規に建設されたことが確実な宿場町に限定する必要上、対象となる宿場町の絞り込みをおこなっている。

第 3 章および第 4 章は、本論文の中核部分である。第 3 章において宿場町の計画意図の読解を実施し、第 4 章において宿場町建設後の空間変容の分析をおこなっている。いずれの章においても、計画要素相互間の関係性の強弱に着目し、強い関係性相互間の序列という視点から分析をおこなっている点に特徴がある。

第 3 章において、分析対象とする計画要素が①宿駅領域、②宅地割り、③街道・道筋、④水系・水路、⑤公共的施設、⑥建築・構築物の 6 つに分類することができる点を明らかにし、次いで、各宿場町においてどのような計画要素の組み合わせが計画立案上重視されたかを推察し、そこから計画立案プロセスを推論する手法を用いて、各宿場町ごとの計画立案プロセスの違いを明らかにしている。その結果、6 つの計画要素の関係性によっていくつかの計画立案段階が構成されていることを示し、それを「層序」と名付けている。各

宿場町において優先される計画要素の順番が異なっており、それが異なる層序として認識することが可能である点を明らかにしている。さらに、異なった層序によって対象とする宿場町は3つの類型に分類されることを示している。

第4章においては、同様に、宿場町の変容過程においても、層序が改変をうけるプロセスとしてとらえることが可能であることを示し、計画意図の継承スタイルも4つの類型に分類できることを示している。

第5章は、全体の結論をまとめた章である。分析の結果、宿場町には6つの要素から成る計画意図が存在することを示したほか、それが「層序」と名付けられる計画要素間の固有の関係性によって規定されていることを明らかにしている。

以上、本論文は、従来地質学の分野で用いられていた「層序」という概念を都市計画史の分野に援用することが可能であること、それによって新たに都市の計画意図を読解することが一定の手続きの本に可能となることを科学的に示した点で独自性があり、今後の都市計画史研究においても有用な分析手法を提供した論文として高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。